

し出来あがつた標柱が運ばれて月形の武田大庄屋のところに届いたのはかなり後で、恐らく孫左正門の死後のことであらう。又月形大庄屋武田市左正門は七十才の老令、お役目大儀となつた外は事情からか大庄屋を辞退し、同族の武田與兵衛へ武田遠部氏家祖の後をうけた。そして世は幕末の動乱期に入り、恐らくそれやこれやで標柱を見明峠に運んで建てることばうやむやのうちになつたので、明倫維新廢藩置縣となつたので町領も佐伯領もなくなつたので、あたら今日まで百十數年と床下に眠りつづけたのである。

然しこの石の標柱には横川村の歴史がかかつて居り、特にこれが月形にあることによつて、大庄屋武田家の歴史を示している。所有者の理解をいたしてこの石柱を旧大庄屋敷敷の一角に打ち建て、いつまでもこの村の歴史の証として後々まで残したいものである。

(おわり)

荒物

梅牟礼城物語 (上)

— 矢田持雲「太閤記」による —

高橋 智 節

(会費・南海部町立史料三巻)

信長のあとを受けて天下の統一を目指す秀吉が、最後の仕上げとして中国の毛利勢を先鋒に九州征伐に着手したのは、天正十四年のことであつた。

これに對し九州の南半をその勢力下にもつ雄藩島津は、「なり上り者の秀吉、何者ぞ」と決戦の決意をかため、秀吉方に意氣を通ずる豊後の大友征伐にその鋒先きを向けたことよりこの譯ははじまるのである。

大友征伐の議が決するや、義父は弟家久に兵一万、弟義珍に兵三万をさづけに出陣させた。

南軍の先鋒なる島津家久は、諸將を従えて^{おんたいし}杵築(延明)で土持親信を合流せしめ、^{あき}杵築を越えて宇目御に入り附近の諸壘を掃蕩して、朝日岳城(重岡)では柴田紹安を合流し、三重御で土豪麻生紹和に内応を約さしめて、ここを家久の根拠地とした。ここより大野郡の各地に使を發してそれぞ配下におさめ、又南軍の別働隊たる義珍は諸將を従えて八代を略して阿蘇の兵と合流、十月二十二日には高城(直入郡荻村)を拔き神泉城(延岳村)入田宗和の士卒と合流、ついに鳥岳城(緒方村)を陥れて北上しつづつあつた。

家久の隊は十一月二日土持親信、新納親吉等に兵二千を援けて梅牟礼城に向わしめ、陣營玄西堂をして佐伯太郎に降伏をすすめるべくつかわしたものである。玄西堂は勇士十八人を従えて切柵まで乗りつた時、早くも注進によつて知らせを受け左太郎惟定は、佐伯右正門以下の一族や重臣を本丸に召集し、火急の評議会をひらいた。「島津は祖父叔母等のために以不倶戴天の仇である。今陣營を差向くるは必定和睦が手切れかの手詰の談判と存ずる。余も弱年と悔り憎きいたし方、各々の所存はいかに。」

と一座を見まわした、当時北の立花宗茂と太郎は同年の十八才であつたという。太郎の言を聞いて一同は右と左とも答えず、大義は明分であつても利害は明分せぬと云ふんばかりの薄暗い顔は、いづれも返答に窮した。

「いかでござる、各々方の御所存は——」

と太郎はピシリと鞭うつ如く促した。「そればそのウ——」と意味をなさぬ言葉が、同時に二三人の口から洩れた。

「若(殿)のいわれることあらば立派なことは判つてゐるが、島津勢は今朝に乗つとる。その島津にたてついて、もし佐伯の家が亡んたら」

と猫の様な声を出すものがある。

然し太郎はこゝ悲鳴に不服であつた。彼の聞かんとするところとは義理の判断であつて、利害の打算ではなかつた。自分は弱軍だから利害の打算ではあるいは違算があるかも知れぬが、義理の判断では万々誤らぬつもりである。それにも拘らず一門の長老に向つてあがり切つたことを相談するのには、士氣を統一しにくいからである。

「それでは各々方は大義よりまず損得を考えよ、とこの太郎に申さるゝのでござるか。代々恩顧の大友家を捨てて、島津の重門に尾を垂れよと申さるゝのでござるか」と耳の根まで赤くして反問した。

「そう云うわけでは無いけれど」と
と苦しがつて見ても、つゝあるところはそう云うわけなのだから、評議は行きへまりの形となつた。

その時へどての襦とスルノと聞いて、太郎の母刀自がはいつてきた。

「軍議の席へ女が口出しをするのではなけれど、当家の一大事故一口お許し下さい。」

太郎は母を上座に請じた。母刀自は我と我が膝の上に服を落して、

「先程からの様子は次の間で寂らず聞きました。太郎殿の云うことも家のため、各々の云うことも家のため、とまどもに歳しう聞きました。家のためと申すにもさまたまあつて、家が鈍いて後世までも汚名を負うこともあり、家は亡びても武士の譽を天下におげることもあり、私の所存も太郎と同じこと。島津は夫(誰某)のかたき舅(尊叔)の仇、まして佐伯の家は大友屋形には代々の

恩義を蒙りながら、今眼の前で勢力が目かくれて島津に降るときは、たとえ家名は続いて世の物笑ひになりましよう。こゝとこゝとは手端も行かぬ太郎を助けて、父老の尽きるまで島津をさえぎつた上、城を扼に討死してはたまるまいか。」

別段激語も放たず物静かに語るものであるが、聞いてゐるうち一同の血潮は高鳴りを止めた。この血が眠つてゐる間は命が惜しいけれど、祖先伝来の血が目覚めてゐると、命など物の数ではない。いあんや成敗利鈍をや。こゝう云ううちに島津の使僧は一步一步近づいてくる。

「敵の使者を城に入れ申すか。」

「いや入れてはいかん。途中で討ち果すがよい。」

「討手は？」

「それは後程人選すればよろしい。それよりもまず使者を迎えを出して、いんぎんに案内させ、城に請し入れると見せかけて」

「うむ、して誰か出迎えに参る。」

「それは拙者におまかせ下さい。拙者の家来に杉谷帯刀と申すものは生れつき左様のことは心得ております。」

と高畑伊予守が自分の郎党を推薦した。

すぐに杉谷帯刀なる者が評議の席に呼び出された。のつしのつしと意入つてきた帯刀なる者は、両肩は小山の如くそむえ象のような柔らかな眼をした肥太漢である。彼は十一月と云うのに大きな鼻の頭に汗をかいて、それを見えず掌でこすりながら、

「なにがねに御用で——」

(以下次号へ)